日医報告

平成19年度医療政策シンポジウム
脱・「格差社会」と医療のあり方

常任理事　直江　寿一郎

3月9日午後1時から日医会館講堂で開催されたシンポジウムには約350名が出席。テレビ会議システムにより全国に配信され、道医会館でも長瀬会長ほか役員が聴講した。

唐澤会長に代わり竹嶋副会長が挨拶。唐澤会長はすでに職務復帰しておられるが、本日は大事をとって代わったと説明された。

中川常任理事の司会の下、神野直彦東大教授、評論家の立花隆氏、田中滋慶大教授、山口二郎北大教授により「脱・『格差社会』と医療のあり方」をテーマに講演がなされた。

◇

神野教授は「ラーゴム」(ほどよい)と「オムソーリ」(悲しみを分かち合う)というスウェーデン語を紹介し、小さな政府は誰も幸福にしない。市場原理ではなく、分かち合いの原理へ向かうことこそ日本の医療がめざす姿であると強調した。また、国民が医師や医師会に求めるのは、人間のコミュニティに埋め込まれているような、癒し、悲しみをケアする存在であると述べられた。

立花氏は、「僕は全身『生活習慣病』」と切り出し、昨年12月には膀胱がんを手術したことを明かした。日医について、武見元会長の存在が強く悪い印象を持っていたが、講演を引き受けるに当って送ってもらった資料でイメージが変わった、と述べられた。

「現在の医療崩壊は、1983年の医療費亡国論から始まっている。このままでは医療破綻国家になる」と述べ、「道路特定財源を保持しようとする政治勢力が、医療費亡国を叫びながら土建国家を作ろうとしている。公共事業に投資する分を医療費に充てるべき」と強調された。また、臨床研修医制度の導入により何が起こるのか、国はデザインシュミレーションが不十分と批判された。

田中教授は、医療システムの維持が困難になった原因について、格差の拡大と、医療技術の急速な進歩、患者や医師の意識変化に対応せず、資源投入を十分にしてこなかった二点を挙げた。社会的共通資本である社会保障、とくに医療・介護に「小さな政府」を良しとする単純化したロジックを持ちこむのは、患者など弱者への負担移転になると批判された。

山口教授は、政治弱者がなぜ「小さな政府」を支持したのかアンケート調査をもとに格差社会をもたらした背景を分析し、リスクを普遍化するシステムが機能不全に陥っていると指摘された。

◇

パネルディスカッションでは、竹嶋副会長も加わり、企業税率、消費税の引き上げ、医療保険料の事業主負担問題などに話が及んだ。

田中教授は「事業主負担を増やす方向で考えるべき」と述べ、山口教授も、「政権を取る気のない政党は何でも言えるが、税制改革は政治の世界では取り上げにくい」と述べた。神野教授は、「1990年代に所得税と法人税を引き下げたのは先進国では日本だけであり、欧州では所得税の引き上げが限界になり付加価値税（消費税）を引き上げている。景気がよくなって来ている今は、所得税と法人税を引き上げるのが本来の姿」と指摘。「安易に消費税を引き上げるべきでない」という意見が相次いだ。

次　第

総合司会：今村 定臣
（日本医師会常任理事）

開　　会　13：00
主催挨拶　　竹嶋　康弘（日本医師会副会長）
テ ー マ　「脱・『格差社会』と医療のあり方」
基調講演　脱「格差社会」戦略と医療のあり方
　　神野　直彦（東京大学大学院経済学研究科教授）
講　演Ⅰ　医療のあり方―患者の立場から
　　立花　　隆（評論家）
　　Ⅱ　格差社会と医療システム
　　田中　　滋（慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授）
　　Ⅲ　社会保障を巡る政治の展望
　　山口　二郎（北海道大学法学部教授）
―休憩―
パネルディスカッション
　　脱「格差社会」と医療のあり方
　　司会：中川　俊男（日本医師会常任理事）
　　パネリスト：神野　直彦
　　立花　　隆
　　田中　　滋
　　山口　二郎
　　竹嶋　康弘
閉　　会　17：10